

宮津市歴史資料館特別開館スポット展示「故郷に伝わる新宮涼庭の医」要項

1. 要 旨

新宮涼庭は、天明7年（1787）に丹後国由良村の医師新宮道庵の子として生まれ、幼くして福知山藩医であった有馬涼築のもとに寄宿し医療や経書を学びました。十八歳で由良へ帰郷し医師として開業しましたが、文化7年にオランダ医学の知識を求め、長崎へ医術修行に旅立ちました。そして、文政元年（1818）に修行を終え帰郷した後に、京都へ出て開業し、やがて洛中にその名を知られる名医となりました。天保10年（1839）に涼庭が南禅寺の隣に開いた順正書院は、八学科を設けて系統的な医学教育を行い、多くの優れた医者を出しました。また、経済の才にも長じ、南部藩の財政改革に寄与したほか、越前藩の松平家などにも多額の融資を行うなど理財家としての面も知られています。

涼庭には男子なく、門下の俊秀を養子として選び本家のほか、四つの分家を立て、新宮一門の医を繋ぐように繁栄を図りました。本展示では、涼庭の生誕地である由良新宮家に伝わる資料から新宮涼庭と子孫たちの医の足跡を概観します。

2. 会 期 11月3日（金・祝）～11月5日（日） 10時から16時まで

3. 会 場 宮津市歴史資料館（みやづ歴史の館4階） 常設展示室

4. 主な展示資料

(1) 「傷寒論」/張仲景 編/宝暦3年（1753）刊/由良新宮家所蔵

原本は漢代の医師である張仲景による医学書であり、急性悪性感染症（傷寒）や風邪などの急性良性感染症（中風）の病態を分類し、その分類に応じた治療法を簡明に叙述されている。

江戸時代初期に主流であった明代の漢方医学が観念的な理論が先行して実態と乖離する中で、山脇東洋らを中心にして起こった古方派を中心に漢方医学における基礎書として重視された。

(2) 「続方府 馭豎齋 先生実験（写本）」甲斐文貞・宍戸正述 輯録/19世紀後期/ 由良新宮家所蔵

方府 とはと薬品名や製法、その適応症などを記すものであり、各医家独自に編むことが多い。

涼庭の方府は刊本の他、本資料のような多数の写本も残されており普及度も極めて高かったと考えられている

(3) 「新宮涼庭先生言行録」新宮涼亭 編/大正5年（1916）/由良新宮家所蔵

本書は、涼庭の伝記である『鬼国先生言行録』（新宮涼閣 著）の要旨に、涼庭の門人の横井俊輔の子息・俊介の回顧談を加えた内容である。もとは、京都の医師・竹岡友仙が俊介とともに、明治29年（1896）10月から翌年7月にかけて『京都衛生誌』で連載したものであるが、大正5年に涼庭が正五位の追贈を受けた際に、順正医会の希望により連載内容が再訂出版された。編者の涼亭は、本家筋における涼庭の孫にあたる。

(4) 「解剖組織論」版木 新宮涼齋 纂輯/明治12年（1879）刊/由良新宮家所蔵

アメリカの医師であるグレーとレーディによる解剖書の翻訳本であり、内容としては初学者向けのテキストとなっている。涼齋は、浜村（舞鶴市）の内藤玄藩の次男として生まれ、養子として由良新宮家に入り、3代目遼太郎の妹お脇を妻とした。堺医学校の教員を勤めた。